



薬師堂



品秀寺



不動堂

2 畑賀から府中まで

瀬野川の右岸山麓を下ってきた旧山陽道は中野を過ぎると砂走橋から北西方向にルートを取り、往時の畑賀町に入ってくる。

畑賀に入ってすぐ右手の山には鳥籠山（このやま）城跡がある。鳥籠山城は世能荒山の地頭、阿曾沼親綱がつくった城であるが、大永七年（五二七）に毛利・大内両氏の攻撃によって落城した。現在はその跡が残っているだけである。

左手に畑賀川を見ながら山裾を歩いて行くと右手に谷が開けてくる。街道はそのまま北西に進んで行くが、右手の山麓には品秀寺や黄幡神社がある。

品秀寺は『芸藩通志』によれば慶長七年（一六〇二）の開基である。ここには古い杖が保存されている。これは蓮華寺にあった弘法大師の杖といわれている。品秀寺の門前では僧大連（七五七―一八〇〇）によって「畑賀舎」が開かれ、江戸中期から明治初期にかけて門弟教育が行われた。境内には大連が死去した年に建てられた石灯籠や「文政五年（一八二二）七月八日一〇世恵谷の代再建」と刻まれている鐘楼がある（「畑賀の歴史」）。また、付近に蓮華寺の一つで里坊跡といわれる地藏堂がある。

黄幡神は軍陣守護の神で、すぐそばに谷ノ坊（品秀寺）があり、黄幡神社（大原神社、おんばんさん）はその番神堂として建立されたとも考えられる（「畑賀の歴史」）。

平安中期に甲越峠が主要な街道となるまでの古代山陽道は荒山駅と芸駅の間は畑賀川の左岸を通って水谷川沿いに進み、笹ヶ峠を越えて府中町に入っていた。畑賀から水谷間の道は定かでないが、この間に稲荷神社や薬師堂、不動堂などがある。

稲荷神社は畑賀三丁目の中津邸の横にある。祠の中のお札によると嘉永七年（一八五四）とあり、この頃建立されたものと思われる（「畑賀の歴史」）。また、薬師堂は奥畑の若宮邸の前にあり、本尊の薬師如来は正徳三年（一



府中側からみた笹ヶ峠



畑賀村道路元標



曾我神社

七三に農民が田の中から掘り出した木像の仏を安置したものといわれる。不動堂（弘法さん）も奥畑にある。本尊は高さ一六〇センチメートルの自然石に、不動明王と刻まれたもので空海作といわれている。また、現在の堂は安政四年（一八五七）の再建である。

水谷川沿いの谷を上って行くとしだいに谷幅が狭くなり、花立橋の西斜面に曾我神社（ぎおんさん）が見えてくる。笹ヶ峠への上り道はこの曾我神社の背後にあるものと思われるが、現在は人の通行もなく峠道を特定することはむずかしい。

平安中期以降、古代山陽道は現在の畑賀小学校付近から西へ方向転換し、為角（ためすみ）、甲越（こうご）峠を通過して府中へ出るようになった。その畑賀小学校の南東角の道路脇には畑賀村道路元標が建っている。これは高さ八〇センチメートル、縦横約二五センチメートルの石柱で、正面に「畑賀村道路元標」と刻まれている。明治期に畑賀村の道路の中心におかれたものと思われるが、正確な時期など詳細は不明である。もとは現在地より三〜四メートル北に設置されていたが、約一〇年前に行われた畑賀小学校の工事の際に撤去され放置されていたものを現在地に移設したものである。

畑賀小学校を過ぎると本郷橋を渡って為角へと入っていく。現在の県道は為角橋を渡ると右折して県道東海田広島線へ出て為角川沿いに甲越峠へと上がって行くが、古代山陽道は為角橋から先は谷底よりも約二〇メートル高い山麓部を通っていたと思われる。

なお、畑賀町はこれまでたびたび水害にみまわれており、畑賀小学校構内をはじめ数か所に災害復旧記念碑が建てられている。畑賀小学校付近から為角橋までの道はこのような水害のたびに被害を受けており、道路の位置も変わっている。そのため、この付近の旧山陽道の正確な位置を特定することは困難である。

為角橋を左折するとすぐ右手に上り道があり、これを上がって山麓部



上為角の道標



石柱



船越方面への分岐点に立つ道標

しばらく進むと神田充家の敷地を取り囲んでいる石垣の南東角に、石垣に組み込まれている石柱（畑賀町四〇六二）を見ることが出来る。幅は約四〇センチメートル、高さ約五〇センチメートルで、「径松火持べからず」と書かれており、「このみちたいまつもつべからず」と読む。設置年代は不明であるが、明治初期頃ではないかと思われる。範重良時氏によると明治期には石柱はまだ石垣に囲まれておらず、独立して立っていたが、他の三面には文字は刻まれていなかったという。また、当時、道路をはさんだ反対側に道路から落ちないように高さ約一メートルの垣根のようなものがあつた。刻まれている文字はこの木々にたいまつ火がつかないように注意する意味があつたのかもしれない。

さらに進んで行くと船越方面への峠道の分岐点がある。この四つ角の南西角に道標（畑賀村為角）が建っており、左折すれば船越へと向かう。現在の船越方面への道は約五メートル東に新設されており、旧道は現在では使用されていない。道標は高さ約七〇センチメートル、幅約二〇センチメートルで、大正十一年十月に設置されたもので、「右ハ廣島方面〇〇〇」、「左ハ船越村海田市方面〇」と刻まれている。

しばらく進むと県道東海田広島線と出会い、為角川沿いに進んでいく。庄の坪橋（上為角バス停）で現在の県道は直進するが、旧山陽道は右折して谷に入っていく。

上為角から甲越峠に上がる入口から一〇〇メートルほど下がった三叉路に道標（畑賀村為角三四八五付近）が設置されていた（現在は甲越峠登口に移動されている）。かつての上為角から甲越峠への峠道は人が一人通れるほどの狭い道であつたので、大正期に峠の登り口から一〇〇メートルほど下がったところから新しい道を整備した。この道標はそれを機に設置されたものである。昭和六十年頃にこの道は隣接する水路と共に拡張されており、現在の設置場所は多少移動している可能性もある。「左は廣島道」、



現在の甲越峠



甲越峠登口

「大正壹拾壹年拾月為角青年團」と刻まれている。

為角から谷筋を上がってきた道は前記の道標を通過して一〇〇メートルほどで左折して屋根部に出て甲越峠へと登っていく。この道が使用されていたのは大正十一年までであるが、この地点からしばらくは現在でも農作業などで甲越峠東側斜面に向かう人によって利用されている。しかし、途中で道は途切れており、峠まで上がることはできない。

平安中期に安芸国国府が置かれると、旧山陽道は畑賀から西に向かい甲越峠を越えるようになった。「甲越」の名の由来はこの峠を越えて国府に入っていたことから「国府越え（こくぶこえ）」の名が生まれ、のちに「甲越（こうごえ）」になったといわれている（「畑賀の歴史」）。

現在の甲越峠は県道東海田広島線の一部であり、上下二車線の舗装道路として整備され、畑賀・府中町間の主要道路として機能しているが、その主役は人馬から自動車へと代わってしまった。

甲越峠を越えて下り坂になると、左手に視界が開けて府中町から黄金山が見渡せる。また、左手の谷に瀬戸ハイムが広がっている。甲越峠から府中までの旧山陽道はこの瀬戸ハイムの中を通っており、団地造成工事にもなつて当時の峠道の面影をとどめるものは何一つ残っていない。

（土居 晴洋）